

令和6年6月25日無人の月面探査機「嫦娥6号」が無事に中国の大地に帰還したとニュースが伝えた。また月の裏側から試料を持ち帰ったとの快挙が紙面を賑わした。

中国が衛星に名付けた嫦娥とは古代中国の神話に伝わる月の精で、元の名を姮娥こうがといい、夫の名は羿げい、弓の名手である。羿は不老不死の薬を月に住む仙人で、伝説の崑崙山に住むという西王母に頼みやっと手に入れることが出来たのだが、羿が飲まないうちに妻の姮娥が密かに盗み飲んで、一人月へと奔はしって行ってしまうという月に棲む仙女の名「嫦娥」を衛星の名にしている。

かたや日本では平成19年(2007)9月14日月探査機「かぐや」が打ち上げられた。その名の由来は「竹取物語」の姫の名「かぐや」にちなんで付けられたものだ。光輝く美しさから多くの貴公子に求婚されたにも関わらず、満月の夜に月に昇ったかぐや姫伝説は、日本人の月への憧れと満ちては欠ける不老不死を願う日本版と言えよう。

風を防ぐこと室のごとし『播磨国風土記』にうたわれた室津の奥まった山嶺にひときわ聳える「嫦娥山」の標高は265・8m、視界を遮るものは何も無く眼下に寄り添う民家越しに望む海は青く、見応えのある景観が広がる。

古代より渤海を始め中国・韓国など諸国の船が往き来した瀬戸内航路は、物資のみならず精神文化も通じるものがあつたに違いない。とりわけ生糸を通商の要とする中国は、江戸幕府の政策によって自由な航行を許認されていた。明和7年(1770)の薩摩屋本陣文書に「尉ヶ山」との記載を見ると、このころ室津の人々は未だ中国の嫦娥伝説を理解出来ず、片言交じりの音読みに頼った表記だと理解したい。群を抜く高さの嫦娥山は三等三角点の所在地でもあり、瀬戸内航行の船からは、山宛の山(目印になる山)でもあつた。

網干歴史講座会員 垣内 田中早春

